

1 縮作民俗のまなざし

日本では、縄文時代に陸稲を育てていたことがわかっています。弥生時代には本格的な水田稲作がはじまり、現在まで日本での基本的な生業であり続けています。民俗学は、その黎明期から稲作に高い関心を寄せてきました。稲作を巡る民俗研究では、農耕儀礼などの信仰に注目するものと、農具や農法といった技術論を対象とするものがあります。現在は、これらふたつの視点を総合的に扱うことが求められています。



『分類農村語彙』
昭和12年(1937) 個人蔵

日本民俗学の創始者・柳田國男の著書で、農村の民俗語彙を集成しています。本書には36項目が立項されましたが、そのほとんどが稲作にかかわります。この時代、民俗学が稲作研究を中心に据えてきた様子が垣間見えます。



『大阪府民具図録』より「第二十図 箕」(部分)
昭和14年(1939) 本館蔵



2 米づくりのわざと心

米作りは早春の田起こしからはじまります。田に水が入ると、いよいよ田植えとなります。夏の日差しを受けてすくすく育つイネは、秋になり収穫を迎えます。稲作は、一年がかりの大仕事です。その折々で、人びとはイネの成長を願い、神靈に働きかけ祈りを捧げてきました。稲作を一枚の布とすると、農耕技術が経糸、農耕儀礼や年中行事は緯糸にたとえられるでしょう。米という作物は、まさにわざと心の賜物といえます。

春

土を起こし、水を入れ代掻きをして田を整え、イネの苗を植えていきます。この時期、豊作をもたらす稲霊を迎える田植儀礼が営まれます。



ちようしやうり
長床犁
明治～昭和時代 本館蔵(上田清春氏寄贈)

ウシなどの家畜にひかせて土を起こす犁のうち、地面に接する横木(犁床)の長いものです。安定性が高く扱いやすいため、大阪では戦後になっても使用されてきました。兵庫県丹波市・梶原遺跡での発掘調査から、長床犁は7世紀から使用されていたことがわかっています。

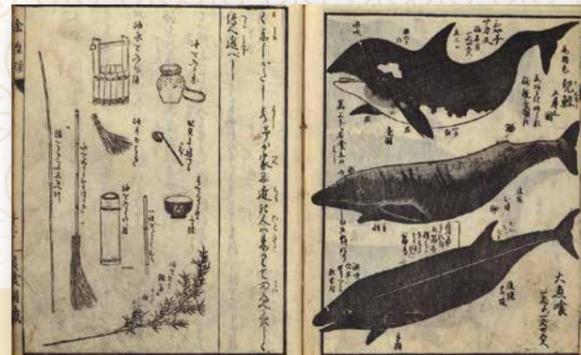


くまた お たうえ
杭全神社御田植神事 三村幸一撮影
昭和34年(1959) 本館蔵

大阪市平野区・杭全神社で4月13日(昭和30年代までは1月)に営まれる神事です。この神事は能の影響が色濃く、尉面をつけたシテが田植えまでの工程を模擬的に演じます。ここには次郎坊という人形があらわれ、養育・放尿させる所作を伴う点が特徴的です。

夏

イネは茎を増やしながらか大きくなります。この季節は雑草や害虫も増え、水の管理も大変。雨乞いや虫送りなどの儀礼で、イネの成長を支えます。



じよこうろく
『除蝗録』
文政9年(1826) 本館蔵(羽間平安氏寄贈)

鯨油を利用した注油駆除法(水田に油を流し、イネを叩き害虫を落として水没させる方法)を推奨する農書です。農業が開発されるまで、鯨油などの油も農具のひとつと考えられてきました。



秋

稲穂が垂れてくると、ようやく収穫となります。収穫儀礼を通して豊作に感謝し、稲刈りや脱穀で使用した農具を祀り、冬を迎えます。



せんばこ
千歯扱き
明治～大正時代 本館蔵(中野武治氏寄贈)



並んだ歯に稲穂をかけて扱き、脱穀する道具です。享保21年(1736)刊行の『和泉志』によると、高石村(現:大阪府高石市)の職人が発明したとあります。大阪府下では、稲扱きが終わると千歯扱きを洗い、餅やご飯などを供えました。これをコキオサメといいます。

冬

農耕神でもある歳神を迎えるため、門松や鏡餅を飾ります。新年には、一年の豊作を前祝いする予祝儀礼や年占を行い、次の米作りに備えます。

せんき
占記
昭和39年(1964) 本館蔵

大阪府東大阪市・枚岡神社では、1月15日の小正月に小豆粥を炊き、占竹という竹筒の束への詰まり具合で作物の豊凶を占う粥占神事が行なわれます。この日、占木を焼いて天候を占う天候占も行なわれます。占いの結果は占記に記載され、参拝者に配布されます。



『摂津名所図会』より「箕面滝」
寛政10年(1798) 本館蔵

本書には、箕面滝にある竜穴について「その深き事はかりがたし」とあります。安永7年(1778)成立の地誌『名葦探杖』には、竜穴に白馬の首を投げ入れて雨乞いするとみえます。一方で、嘉永6年(1853)の『古今未聞大早魃記録』によると、さらに上流部の雄滝でも雨乞いをしています。

